〔東京家政大学研究紀要　第46集 (1), 2006, pp. 237～244〕

親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅰ：家族構造の世代差

井森　澄江*，井上　俊哉**，大井　京子***，西村　純一****，斉藤こずゑ*****

（平成17年10月6日受理）

Life-span Development Psychological Study of the Relationship of Parents and their Children I : Analysis of Generational Dependence in Family Structure Based on Questionnaire

IMORI, Sumie　INOUE, Shunya　OOI, Kyoko
NISHIMURA, Junichi and SAITOU, Kozue

(Received on October 6, 2005)

キーワード：生涯発達心理学的研究、親子関係、家族構造、質問紙法

Key words : life-span developmental psychological study; the relationship of parents and their children; family structure ; questionnaire method

本研究の問題・目的

近年の平均寿命の大幅な延長，ライフスタイルの変化等に伴い，家族の形は多様化しつつある．そのなか，今日の家族には家族の持つ養育，養護といった重要な機能の機能低下が指摘されている．とくに，乳幼児期の子どもの養育養護と関連した「親と子」，中高年期の親の養護介護と関連した「親と子」を巡っては，様々な問題が顕在化しつつある．本研究は生涯発達心理学的観点から，この現在の多様化する家庭の「親と子」の様相を明らかにすること，また，家族の機能である養護性が個人の生涯を通じてどのように形成発達していくのかについて，主に親の養育行動，養護性と親子間の愛着との関連から検討することを目的とする．今回の一連の報告Ⅰ－Ⅳでは，成人各世代が親と子（自分）との関係をどう捉えているのか．また，子として老いた親の養護介護についてどのような意識を持っているのか．という点から現在の親と子の様相を探っていく．また，これらの親子関係の形成に関連する親の養育態度は戦前，戦後，現代で，どのように変化したのか，また親と子の愛着関係に年代的，世代的変化はあるのかについて検討していく．報告Ⅰでは今回の対象者の構成について概略し，そこからみえてくる家族構造の年代的，世代的変化について明らかにするとともに，成人各世代が親と自分との関係をどう捉えているのかを示す．また報告Ⅳでは子として老いた親の養護介護についてどのような意識を持っているのか，その年代的，世代的相違を明らかにする．そして報告Ⅱで親の養育態度，愛着関係を評定する尺度（PBI，IPA）の検討を行い，報告Ⅲで愛着，養育態度の年代的，世代的変化について検討していく．

方　法

1．対象者；首都圏のＡ女子大学，短期大学（旧制高等専門学校を含む）を卒業した女性979名（範囲20歳～92歳）
2．実施時期；2004年10月～12月
3．質問紙郵送調査；女子大学同窓会名簿からランダムにサンプリングされた4200名に質問紙を郵送，記入後返送を依頼した（回収率23％：表１参照）．
4．質問紙の概要

フェイスシート（FQ１～FQ11）をはじめ，Ｑ１「結婚，親になるなどのライフイベントが生じるのにふさわしいと考える時期」（10項目），Ｑ２「理想の生き方」，Ｑ３「実際の生き方」，Ｑ４「夫婦関係」（12項目），Ｑ５

*　発達心理研究室
**　教養部情報処理研究室
***　文学部心理教育学科資料室
****　老年心理研究室
*****國學院大学

「現在の愛着（IWM尺度）」（18項目）と「就学前の母子関係」（9項目），Q６「親の養育態度（PBI）」（25項目）と「青年期の親への愛着（IPA）」（28項目），Q７「親と自分との関係」（21項目），Q８「老いてくる親への世話についての態度や気持ち」（28項目），Q９～Q14「自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望」，Q15「幸福な老いについての考え」，Q16～Q18「生き甲斐」，および子育て経験者のみに回答を依頼したFQ12～FQ14「自分自身の子育て行動・感情」の項目からなる．

配置順はQ１～Q18，FQ１～FQ11，FQ12～FQ14である．フェイスシート（FQ１～FQ11）の後に，子育て経験者のみに回答を依頼したFQ12～FQ14「自分自身の子育て行動・感情」の項目をつけ，フェイスシートとともに質問紙の最後に配置した．

また，質問紙への回答に際して，回答の仕方（選択肢法，記述法の両方がある等）のほかに，以下の趣旨のお願いを質問紙の表紙に記載した．①調査への回答は封筒の宛名の本人が記入すること，②Q１から順に回答すること，③自分に該当しない場合は，無記入のままにしておくこと．また答えにくい質問は無記入でもかまわないこと．

５．本報告Ｉの目的と分析内容について

１）本報告Ｉの目的

本報告Ｉでは，(1)フェイスシートの項目の分析を行い，被験者の構成の概略を示すとともに，そこからみえてくる家族形態の年代的変化，世代的変化について考察する．また，(2)「親と自分との関係」に関する項目（21項目）の分析を行い，親と自分との関係の捉え方の年代的，時代的変化について検討する．

２）分析内容

(1) フェイスシートの分析内容；フェイスシートの調査項目は以下に示すFQ１～FQ11からなる．

FQ１：あなたは結婚していますか．１．未婚，２．既婚，３．離婚，４．死別　からひとつを選択してもらう．２，３，４を選択した場合は付問：子どもは何人いますか．男子，女子，合計人数を記述．

FQ２：年齢を記述．（既婚者のみ夫の年齢も記述）

FQ３：きょうだいの有無．１．無し　２．有り　からひとつを選択してもらう．２を選択した場合は何人きょうだいの何番目かを記述．

FQ４：親はご存命ですか．１．自分の父　２．自分の母　３．夫の父　４．夫の母　から健在者すべてを選択してもらう．

FQ５：あなたの育った環境は，次のうちどれにあてはまりますか．１．昔からの家が多く，伝統・習慣を大切にする地域　２．新しい家が多く，伝統・習慣にとらわれない地域　３．その他　からひとつを選択してもらう．３を選択した場合は具体的環境を記述．

FQ６：子どものころの母親の就労形態は，次のうちどれに当てはまりますか．１．専業主婦　２．パート　３．常勤　４．家業　５．その他　からひとつを選択してもらう．5を選択の場合は具体的就労形態を記述．

FQ７：子どもの頃，自分よりも小さい子の面倒を見たり，一緒に遊んだりしたことはありますか．１．ある　２．ない　からひとつを選択してもらう．２を選択した場合は具体的な関わり方を記述．

FQ８：現在の職業は次のうちどれですか．　１．会社・団体などの役員　２．管理的職業　３．事務的職業　４．専門的・技術的職業　５．販売サービス的職業　６．保安サービス的職業　７．技能的・労務的職業　８．自営業主・家族従業員　９．自由業　10．専業主婦　11．無職　12．その他　からひとつを選択してもらう．

FQ９：現在の健康状態について　１．非常に健康　２．まあ健康　３．注意する点はあるが，日常生活に支障はない　４．注意する点があり，日常生活に制限がある　５．病気がち・療養中　からひとつを選択してもらう．

FQ10：現在お住まいの居住形態は次のうちどれですか．１．一戸建て　２．アパート，マンション　３．その他からひとつを選択してもらう．１．２．を選択した場合は持ち家か借家かを選択．3．を選択した場合は具体的居住形態を記述．

FQ11：現在，同居のご家族の方は何人いらっしゃいますか．

１．自分以外に（　）人　２．いない（自分ひとり）からひとつを選択してもらう．１.を選択した場合は（　）内に人数を記述．また，１．を選択した場合は付問：同居されているのはどなたですか．１．自分の父　２．自分の母　３．自分のきょうだい　４．配偶者　５．息子　６．娘　7．配偶の父　8．配偶の母　9．息子の嫁　10．娘の婿　11．孫　12．その他　から同居されている方すべてを選択．12を選択の場合は具体的に記述．５．６．11．を選択した場合はその人数を記述．

(2)「親と自分（および親と祖父母）との関係」（Q７）

に関する分析内容

「親と自分との関係」を捉える項目として，松井ら（1988）により作成された青年女子の「女性性」尺度の下位尺度である娘性尺度10項目と本研究での新規作成項目11項目の計21項目を用いた．娘性は，自分の親に対する娘の面であり，項目には自分の親への依存，甘え，愛着等の意識や親を気遣い，保護しようという意識などが含まれている．新規作成項目は成人以降の関係を捉えるために必要と考えられた，親の自分への依存，親と自分との個別性の意識，親への尊敬感謝，仲のよさや自己開示の状態，に加えて，親の祖父母に対する敬意，家族の協力の気持ちなどが含まれている（表７参照）．本項目は“Ｑ７：あなたは，親と自分との関係をどのようにみていますか．あるいは，どのようにみていましたか．”と，親が健在か否かにかかわらず回答可能なように，現在または過去の関係について問う形を採った．また，各項目に対し，他の多くの設問と同様に「1．全くあてはまらない」から「6．非常によくあてはまる」までの６段階で評定を求め，それぞれの評定に１点から６点の素点を与えて分析した．

結　果

１．フェイスシートの分析

１）年代構成（FQ２）；表１に各年代の対象者数を示した．表の回収数が研究対象者数である．

表１：年代別被験者数（＝回収数）

年代	配付数	回収数	回収率
20代	800	101	13%
30代	800	120	15%
40代	700	153	22%
50代	550	131	24%
60代	550	186	34%
70代	600	209	35%
80代	200	47	24%
	欠損値	32	
全体	4200	979	23%

２）配偶者の有無（FQ１）；各年代の現在の配偶者の有（既婚），無（未婚，離別，死別）の割合を見てみると，20代は70%，30代は18%が未婚であり，それ以降の年代の未婚者の割合は２－９％であった．また死別は60代までは７％未満であるが，70代で31%，80代で45%であった．

３）子どもの数（FQ１付問）；表２に結婚経験者の子どもの人数とその割合を年代別に示した．最高は60代の６人，ついで，50代，60代，70代で５人の子どものいる人が各１人であった．20代では子どもがいない人が，結婚経験者の52%と半数を占めている．30代以降では，80代が２人と３人が同数である以外は，どの年代も２人がもっとも多く，各年代の44%から61%を占めている．ただし，30代では次に多いのが１人（25%）であるのに対して，40代以降では３人であり，各年代の23%から28%を占めている．

表２：子どもの人数（結婚経験者に占める割合）

年代	0人	1人	2人	3人	4人以上
20代	51.7%	27.6%	17.2%	3.4%	0%
30代	14.7%	25.3%	44.2%	11.6%	4.2%
40代	7.6%	15.2%	48.5%	28.0%	0.8%
50代	3.4%	11.0%	54.2%	25.4%	5.9%
60代	3.8%	14.4%	53.8%	25.6%	2.5%
70代	2.9%	11.5%	60.9%	23.0%	1.7%
80代	0%	12.8%	38.5%	38.5%	10.3%

各年代の平均子ども数は，20代0.72人，30代1.65人，40代1.99人，50代2.20人，60代2.11人，70代2.10人，80代2.46人であり，20代は他のどの年代に比べても子どもの数が少ない．また30代は20代より子ども数は多いとはいえ，50代，60代，70代，80代に比べて少なくなっている．Tamhane法による多重比較によると20代は他のどの年代との間にも有意な差がある．また30代も50代，60代，70代，80代との間に有意差が認められる．40代を移行期として子ども数が明らかに減少している．

４）きょうだいの数（FQ３）；表３に年代別にきょうだいのある場合のきょうだい数とその割合を示した．なお，きょうだいのいない人は40代の13%が最も多く，それ以外の年代では5%から8%を占めていた．きょうだいのある人では20代，30代，40代は２人きょうだいが半数以上を占める．50代でも２人きょうだいが42%ともっとも多い．20代から50代までは次に３人きょうだいが多く，２人，３人きょうだいあ

わせると20代の96%，30代の89%，40代の93%，50代の74%を占める．これに対して，60代では2人，3人きょうだいは38%，70代，80代では30%を占めるに過ぎず，4人以上（4～10人）のきょうだいが大半を占めている（4人以上は60代62%，70代70%，80代70%）．

表3：きょうだい数（きょうだい有りに占める割合）

年代	2人	3人	4人	5人	6人以上
20代	60.6%	35.1%	3.2%	0%	1.1%
30代	67.0%	22.0%	5.5%	4.6%	0.9%
40代	56.5%	36.6%	5.3%	0.8%	0.8%
50代	42.3%	31.4%	19.5%	3.4%	3.3%
60代	14.8%	23.7%	29.0%	13.0%	19.5%
70代	10.4%	20.3%	20.3%	19.8%	29.0%
80代	18.9%	10.8%	10.8%	13.5%	32.4%

各年代の平均きょうだい数は，20代2.50人，30代2.50人，40代2.52人，50代2.96人，60代4.10人，70代4.59人，80代4.68人であり，年代が若くなるほどきょうだい数は減少している．Tamhane法による多重比較によると20代，30代，40代の間に有意差は認められないが，20代30代40代と50代以降のすべての年代の間には有意な差がある．また，50代はすべての他の年代との間に有意差がある．そして60代，70代，80代の間に有意な差は認められないが，50代と60代70代80代との間に有意な差がある．戦後世代のきょうだい数は戦中戦前世代に比べて激減している．また戦後10年以上たって生まれた40代より若い世代ではきょうだい数はさらに減少しているといえる．

5）現在の健康状態と両親健在者数（FQ 9，FQ 4）；現在の健康状態について，日常生活に制限があるまたは病気がち・療養中と回答した割合は20代2.0%，30代2.5%，40代3.4%，50代4.8%，60代6.8%，70代10.0%，80代22.3%であり，年代があがるにつれて緩やかではあるがその割合は増えている．ただ80代でも70%以上が（非常に健康，まあ健康を含めて）日常生活に支障のない健康状態にある．

自分および夫の両親の健在者の割合については，60代以降の年代でこの項目の回答率が急減しており，60代では対象者の47%，70代11%．80代1%が回答したにすぎない．しかし，60代の回答者の69%，70代の回答者の65%には自分の母がいる．70代でも自分の母，父，夫の母が健在で，子であることがわかる．

6）育った環境（FQ 5）；表4に育った環境が伝統・習慣を大切にする地域か否かを示した．40代前と以降でその割合に逆転がみられ，20代，30代では新しい家が多く，伝統・習慣にとらわれない地域が過半数を越えている．

表4：育った環境

年代	昔からの家が多く伝統慣習を大切にする	新しい家が多く伝統慣習にとらわれない	その他
20代	39.4%	50.5%	10.1%
30代	44.5%	52.1%	3.4%
40代	54.3%	40.4%	5.3%
50代	61.5%	29.2%	9.2%
60代	70.2%	20.4%	9.4%
70代	74.0%	21.6%	4.4%
80代	76.6%	17.0%	6.4%
全体	61.0%	32.2%	6.8%

7）子どもの頃の年下の子どもとの遊びや世話の経験（FQ 7）；年下の子どもとの遊びや世話の経験がないと回答した割合は，20代20.2%，30代27.4%，40代33.3%，50代32.8%，60代21.0%，70代35.5%，80代41.5%であった．戦前，特に80代で経験のない割合が多い．これは，戦前において女子に旧制高等専門学校までの教育を受けさせることのできた家庭の子どもの（子ども一人に一人の乳母をつけるなどの）生活の特殊性を示すものと考えられる．

8）職業（FQ 6，FQ 8）；表5－1に現在の職業，表5－2に子どもの頃の母親の就労形態を示した．現在の職業では専業主婦に次いで専門的技術的職業が多くを占めていた（全体の18.3%）．子どもの頃の母親の就労形態はどの年代でも専業主婦が第一位である．ただし70代，80代は60%以上を占めているが，60代から20代では40%台～30%台になっている．また40代までは家業が第二位であるが，30代では常勤が，20代ではパートが第二位となっていた．

表５－１：現在の職業（※常勤、パートは問わず）

年代	有職※	家業	専業主婦	無職	その他
20代	85.1%	0%	8.9%	2.0%	4.0%
30代	45.8%	10.0%	35.8%	1.7%	6.7%
40代	59.7%	11.4%	22.1%	1.3%	5.4%
50代	32.1%	19.1%	35.9%	3.8%	9.2%
60代	13.7%	12.6%	55.2%	11.5%	7.1%
70代	10.9%	6.4%	52.5%	26.2%	4.0%
80代	10.9%	2.2%	39.1%	43.5%	4.3%
全体	34.8%	9.8%	38.3%	11.3%	5.9%

表５－２：子どもの頃の母親の就労形態

年代	常勤	パート	家業	専業主婦	その他
20代	16.0%	27.0%	8.0%	46.0%	3.0%
30代	22.0%	17.8%	16.9%	37.3%	5.9%
40代	16.8%	14.8%	26.8%	36.2%	5.4%
50代	13.1%	6.9%	33.8%	40.8%	5.4%
60代	13.1%	1.1%	32.8%	48.6%	4.4%
70代	5.4%	0.5%	29.7%	61.9%	2.5%
80代	2.1%	0%	29.8%	66.0%	2.1%
全体	12.9%	8.8%	26.5%	47.6%	4.2%

9）居住形態と同居の有無（FQ10，FQ11）；居住形態は一戸建てが全体平均78.5%と大半を占めており，20代，30代では50%台であるが，40代で75%，50代，80代で80%台，60代，70代では90%以上と年代が上であるほど，戸建の傾向がある．

同居の有無に関しては20代から60代まで同居者無しは４%～６%であるが，70代では19%，80代では36%になっている．同居者有の場合，表６に示すように，自分以外の人数は20代から40代では３人が最も多いが，50代では２人，60代以降では１人が最も多くなっている．

表６：同居家族(自分以外の)人数(同居者有りに占める割合)

年代	１人	２人	３人	４人	５人以上
20代	20.9%	23.1%	37.4%	9.9%	8.8%
30代	13.2%	24.6%	37.7%	12.3%	11.4%
40代	8.8%	18.4%	29.3%	23.8%	19.8%
50代	26.9%	37.8%	20.2%	8.4%	6.7%
60代	55.5%	24.4%	10.4%	3.0%	6.1%
70代	61.5%	6.8%	6.8%	11.8%	11.8%
80代	50.0%	11.5%	11.5%	19.2%	7.6%

なお，各年代同居者有の場合の平均家族人数（自分以外の）は20代2.67人，30代2.86人，40代3.34人，50代2.32人，60代1.83人，70代2.06人，80代2.27人で，年代が上がるにつれて多くなるが40代をピークに減少し，60代で最も少なくなっている．しかしそれ以降の年代ではやや増加傾向を示す．Tamhane法による多重比較によると，40代は30代を除くどの年代との間にも有意差がある．60代，70代，80代の間に有意差は認められないが，60代と20代30代40代50代の年代の間には，また70代と20代30代40代の間には有意差がみられる．50代までは子どもを含む家族が主であるが，60代では夫と２人家族が主になり，70代，80代では夫と２人家族の場合もあれば，子どもや孫を含む家族の場合も，１人（単身）暮らしを選ぶ場合もかなりあることが読み取れる．

２．「親と自分との関係」の構造とその年代的変化

１）「親と自分との関係」の因子構造

「親と自分（および親と祖父母）との関係」に関する21項目の全回答について因子分析を行い（解釈可能性を考慮し４因子として，重みなし最小二乗法プロマックス回転後，負荷量の小さい項目や複数の因子に負荷の高い項目を除外し），最終的に19項目となった．得られた因子パターンは表７に示す通りである．

表７：「親と自分との関係」因子パターン

	1	2	3	4
困ったときは親にそばにいてほしい	**0.88**	0.00	-0.09	0.03
私は親に依存しすぎている	**0.87**	-0.28	-0.09	-0.03
自分で決心できないときは親の意見に従うようにしている	**0.77**	0.00	-0.02	0.02
何かするときには、親に励ましてもらいたい	**0.72**	0.13	-0.02	0.00
困ったときは親に頼りたくなる	**0.67**	0.23	-0.05	-0.03
私は親を尊敬している	-0.02	**0.78**	-0.01	0.11
親は私に依存しすぎている	0.35	**-0.73**	0.45	0.01
私は、親と仲がよい	-0.05	**0.68**	0.17	0.01
親は自分の心の支えである	0.33	**0.60**	0.01	0.00
親といるだけでなんとなく安心できる	0.31	**0.59**	0.07	-0.06
私は親元を離れて、親のありがたみが分かった気がする	0.00	**0.53**	0.05	0.00
私は親に何でも相談したり、悩みを打ち明けたりできる	0.23	**0.46**	0.10	0.02
親の頼りにされていると感じることがある	-0.20	-0.17	**0.84**	-0.01
親の精神的な支えになりたいと思う	-0.19	0.31	**0.66**	-0.03
親に対しては良い子でいたいと思う	0.12	0.13	**0.50**	0.01
親の期待に沿った生き方をしたい	0.15	0.06	**0.50**	0.07
親は、祖父母を大切にしていたと思う	0.00	0.04	-0.08	**0.90**
親は、祖父母の考えを尊重していたように思う	-0.01	-0.03	0.09	**0.76**
親と祖父母の間にはいさかいがあった	-0.01	-0.12	0.01	**-0.31**

第１因子は「困ったときは親にそばにいてほしい」「私は親に依存しすぎている」などの５項目からなり，“親依存”の因子と，第２因子は「私は親を尊敬している」「親は私に依存しすぎている（逆転項目）」「私は親と仲がよい」などの７項目からなり“親との安定したパートナーシップ形成”の因子と，第３因子は「親の精神的

支えになりたいと思う」など親への思いやりの2項目と「親の期待に沿った生き方をしたい」など親の役割期待尊重の2項目の計4項目からなり“親尊重”の因子と，第4因子は「親は祖父母を大切にしていたと思う」「親と祖父母の間にはいさかいがあった（逆転項目）」などの3項目からなり“親の両親への尊重”の因子と命名した．

2）年代的変化

「親と自分との関係」の4因子の各因子得点の年代別平均値をグラフ化したものを図1～4に示した（因子得点は1～6点の間の値）．

第1因子：“親依存”得点は図1に示す通り，20代で高いがその後年代が上がるにつれて低くなり，40代50代で最も低くなる．そしてその後は年代が上がるにつれ再び徐々に高くなり70代の得点は20代よりは低いが30代より高くなっている．親依存は成人では20代で最も高く40代50代で最も低い．多重比較によると20代と40代50代の間には有意な差がある．しかし70代と40代50代の間には有意な差は認められない．20代では親依存傾向は高いこと．そして働き盛りの年代にかけて低くなっていることがわかる．ここには青年期の延長の問題が反映されていると思われる．また70代でもやや高いが戦前世代のこの親依存の高さは戦前の女子への役割期待が影響していると思われる．

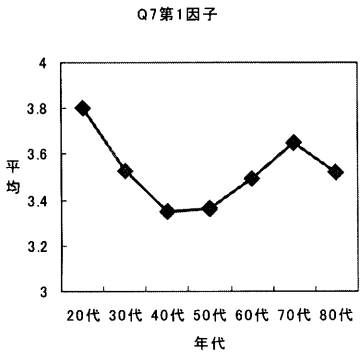

図1　“親依存”

第2因子：“親との安定したパートナーシップ形成”の得点に関しては回答者の平均が4.39であり，親依存の因子の得点の3.52に対してかなり高い．年代別平均値（図2）をみると20代から30代にかけて増加するが，40代で減少し50代でやや増加，その後増加し70代で最も高い．多重比較によると40代と30代60代70代の間に有意な差がある．また50代と70代の間にも有意差があった．40代および50代での親との安定したパートナーシップ形成の低さに関しては愛着や養育態度との関連を検討する必要があると思われる．

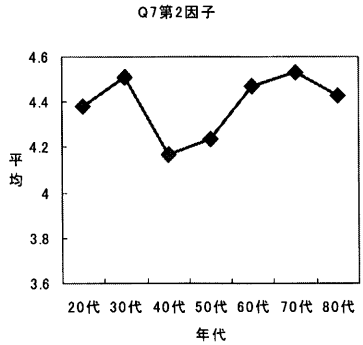

図2　“親との安定したパートナーシップ形成”

第3因子：“親尊重”の得点は図3に示す通り，20代から50代までは40代でやや高い傾向はあるものの得点は4.0－4.1であり，横ばいで推移しているが，50代から60代にかけて増加し，以降年代が上がるにつれて高くなっている．多重比較によると20代30代50代と70代の間に有意な差がある．戦前世代と戦後世代で受けた教育の違いがこの差に影響を与えていると思われる．

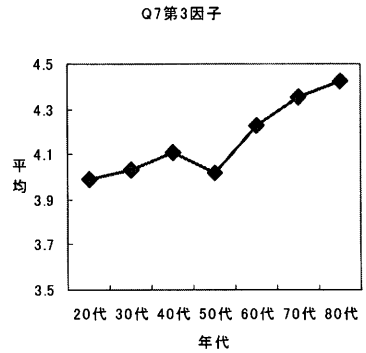

図3　“親尊重”

第4因子：“親の両親への尊重”の得点は回答者の平均が4.52と4つの因子の中で最も高い．年代別平均値（図4）をみる20代でかなり高いがそれ以降やや低くなり40代50代で最も低い．50代から60代にかけて増加し，以降年代が上がるにつれて高くなる傾向がある．多重比

較によると40代と70代の間に有意差が認められた．戦前世代と戦後世代で“親尊重”同様，差が出るかと思われたが，20代で戦前世代回帰傾向があり，核家族化が進み，距離を置いた関係の中で親の両親への尊重を体験してきていることが影響しているのか．それとも愛着や養育態度が関係しているのか．今後の検討課題である．

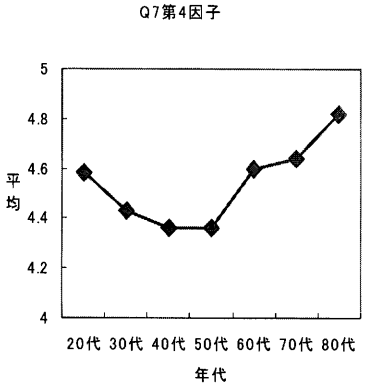

図4 “親の両親への尊重”

まとめ

1．フェイスシートの分析結果：家族の年代的世代的変化

1）子どもの数，きょうだい数などから戦後世代の家族の小規模化が読み取れる．
特に戦後10年以降（40代より若い世代がうまれたころから）さらにその規模は縮小している．育つ環境もその40代世代を境に伝統・習慣を大切にする地域から新しい家が多く，伝統・習慣にとらわれない地域へと変わっている．

2）現在の家族の規模に関しては40代で人数はピークとなり，以後60代で最小となる．60代では夫と2人家族が主になり，70代，80代では夫と2人家族の場合もあれば，子どもや孫を含む家族の場合も，1人（単身）暮らしを選ぶ場合もかなりあることが読み取れた．

2．「親と自分との関係」の分析結果：構造とその年代的変化

「親と自分との関係」に関しては“親依存”“親との安定したパートナーシップ形成”“親尊重”“親の両親への尊重”の4因子が抽出された．“親依存”は20代が40代50代に比べて高い．また，“親尊重”は戦後世代が戦前世代に比べて低くなっていることが示された．

謝　辞

本研究ではA大学，短期大学の多くの卒業生の方々のご協力を得ました．お忙しい中，多数の質問項目にお答えくださいました卒業生の方々に深く感謝いたします．

付　記

本研究は東京家政大学大学院共同研究の一環として実施されたものである．

引用文献

Ⅰ）松井　豊，青木まり（1988）青年期後期における女性性の発達Ⅰ　立川短期大学紀要21

Abstract

Focusing from a viewpoint of life-span developmental psychology on several aspects of relations between parents and children in a family, we study how nurturance forms and develops as function of the family through the course of personal life. We sent a questionnaire to 4,200 females whose ages range from 20 to 80, and received answers from 979 respondents. The questionnaire included a face sheet asking the respondent about marriage, the number of children, the number of siblings, occupation, the number of people in the family, rearing environment and so on. The questionnaire also contained inquiries about the rearing attitude of parents, relationship to parents and attitudes towards care for parents. Analysis of the face sheet shows that the number of people in a family, and the number of children, begin to decrease after World War II, and that the decrease becomes outstanding ten years after the war. It can be seen that the rearing environment changes widely at the same time. The number of people in a family reaches a peak for the respondents in their forties and the dominant members of a family become a wife and a husband for the respondents in their sixties. Analyzing relationship to parents shows four factors: dependence on parents, stable partnership with parents, observance to parents, and parents being obedient to grandparents.